

5-2 教育改革のための情報通信技術活用に伴う知識と戦略的活用の普及

5-2-1 私情協 教育イノベーション大会

<事業計画>

大学におけるデジタル変革(DX)が今後一層進展していくことを踏まえて、教育改革に向けた DX、学生支援改革に向けた DX、業務改革に向けた DX の観点から、先行して取組んでいる好事例の紹介及び意見交流を行う。例えば、学修者本位の教育の推進、イノベティブな人材育成を目指す PBL 等を含む分野横断型教育の推進、対面と遠隔を効果的に組み合わせたハイブリッド型教育(反転授業など)の推進、仮想空間(メタバース)を活用した学びの質向上、デジタル人材育成の推進、グローバル人材の育成を目指した外国大学とのオンライン連携授業の国際通用性などについて、情報提供又はシンポジウムなどを行う。また、ICT 利活用による授業改善の研究や学修成果の可視化など実践事例の発表、大学・賛助会員連携による ICT 導入・活用事例の紹介を通じて理解の促進・共有を図る。

<事業の実施結果>

「教育イノベーション大会運営委員会」を継続設置し、「私情協 教育イノベーション大会」を実施した。以下に、委員会及び教育イノベーション大会の活動を報告する。

教育イノベーション大会運営委員会

2023年(令和5年)7月28日、2024年(令和6年)3月11日に平均13名が出席し、2回開催して「私情協 教育イノベーション大会」の企画・実施準備と振り返りを行った。

(1) 開催要項の策定

- ① 大会のテーマは、「AI時代の教育と人材育成を考える」とした。開催の趣旨は、デジタル革命の真ただ中であって、持続可能な社会を創り出す担い手としての教育のあり方、個人の幸せと社会の豊かさを実現するための教育のあり方の観点から、大学としてどのように向き合うことが期待されるのか考察することにした。具体的には、国の教育政策を共有する中で、変革の世紀を生き抜く教育課題の論点、生成系 AI への対応、デジタル教材の著作権対応と生成系 AI の対応、教育・学修支援 DX と業務支援 DX、学びの質向上を目指す ICT 活用、データサイエンス・AI 授業のワークショップなど喫緊のテーマを取り上げ探求するとともに、ICT 利活用による授業改善の研究発表などを通じて理解の促進を図る機会とした。
- ② 第1日は、「全体会」として、「我が国の教育をめぐる現状・課題・展望」、「変革の世紀を生き抜く教育を考える」、「国等が取り組むデジタル人材の育成・確保」、「大学教育への変革を迫る生成系 AI の取り扱い」、「メタバース(仮想空間)による教育を考える」について理解を共有することにした。
- ③ 第2日は、「テーマ別意見交流」として、「生成系 AI に対する大学対応(研修等含む)の紹介」、「企業における生成系 AI 活用の対応(社員教育含む)紹介」、「生成系 AI 授業活用事例の紹介」、「働き方改革、業務支援 DX」、「学修者本位の教育、学びの質向上を目指す DX の試み」、「デジタル教材の著作権対応と ChatGPT の対応」、「学びの質向上を目指す ICT 活用の取組み」、「文系学生向けデータサイエンス・AI 授業のワークショップ」、「メタバースによる大学授業活用事例の紹介」の9分科会を設けて意見交換することにした。
- ④ 第3日は、教育改善に向けた ICT 活用の発表及び意見交流の機会を提供するため、参加者を募集して実施することにした。また、大学と企業連携による ICT 環境導入事例は事前に紹介ビデオを作成したものを休憩時間に配信することにした。なお、開催要項は、次ページを参照されたい。

9月5日(火): 全体会

9:50	開会挨拶 公益社団法人 私立大学情報教育協会会長 向殿 政男氏
10:00	【我が国の教育をめぐる現状・課題・展望】 新たな教育振興基本計画のコンセプトと高等教育の政策 将来の予測が困難な時代において教育政策の進むべき方向性を示す「羅針盤」となるべき総合計画として、閣議決定された令和5年度から9年度における第4期教育振興基本計画について、社会の現状や変化への対応と今後の展望などから、高等教育機関として教育政策を着実に推進する目標と基本施策を紹介いただきます。 廣田 貢氏 (文部科学省総合教育政策局政策課企画官)
10:40	休憩
10:50	【変革の世紀を生き抜く教育を考える】 「教育の未来」を築くイノベーションの学びとは デジタル革命の先にある教育を十全に実現していくには、従来からの教育の理念と方法を超越するイノベーションやデジタル技術の効果と限界を理解し、効果的に使っていくことが重要です。その上で、広くイノベーションを担う人材の育成が不可欠ですが、そのための見本はありません。教育関係者自らが未来を託す学生の幸せに力の限り努力し、教育のDXによる学びのオープン化、イノベーションスキルの育成、リベラルアーツの養成など、何をどのように学ばよいか、その学びをどのように支援すればよいか、論点を整理いただきます。 安西 祐一郎氏 (東京財団政策研究所長、日本学術振興会顧問、本協会副会長)
11:30	【国等が取組むデジタル人材の育成・確保】 数理・データサイエンス(DS)・AI教育の推進・普及と生成AIの取り扱い 令和5年度の申請状況を踏まえた数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度の概要、コンソーシアム活動によるリテラシーレベル・応用基礎レベルのモデルカリキュラムや教材等の普及による全国展開の推進、政府提言等の政策動向、大学・高専における生成AIの教学面の取扱いなどについて紹介いただきます。 奥井 雅博氏 (文部科学省高等教育局専門教育課長補佐)
12:10	休憩 (大学・企業連携によるICT導入・活用事例の紹介)
13:00	【シンポジウム】 大学教育への変革を迫る生成系AIの取り扱い 対話型ChatGPTに代表される生成系AIの出現に、大学教員はどのように向き合うことが適切と考えればよいか、学生に活用させる上で留意すべきこと、使いこなすための訓練の必要性などを通じて、知識偏重型教育から考えるプロセス重視教育への転換を含め多面的に議論していただきます。 竹村 彰通氏 (滋賀大学学長) 須藤 修氏 (中央大学ELSIセンター所長、国際情報学部教授) 安西祐一郎氏 (東京財団政策研究所長、日本学術振興会顧問、本協会副会長) 森本 康彦氏 (東京学芸大学ICT/情報基盤センター、情報教育教室教授) 金丸 敏幸氏 (京都大学国際高等教育院附属国際学術言語教育センター准教授) 高橋 英弘氏 (京都産業大学法学部教授) 司会: 辻智氏 (私情協情報教育研究委員会データサイエンス教育分科会アドバイザー、大阪公立大学研究推進機構特任教授)
15:00	休憩
15:20	【メタバース(仮想空間)による教育を考える】 新しい世界を知る機会に 自分に代わりバーチャルの分身としてのアバターを使うことで、偏見や先入観を排除して様々な人と広く交流し、性別・国籍・年齢・立場を超えて新しい人間関係を作り直す、新しい文化や社会を知る機会になる、実験や自習など体験をともなう学びの機会の補充など、学内外の学生、中高生や社会人向けに大学の講義をもとにしたオンライン講座などを提供している東京大学「メタバース工学部」などの取組みを紹介いただきます。 雨宮 智浩氏 (東京大学バーチャルリアリティ教育研究センター教授)
16:00	終了

9月6日(水): テーマ別意見交流

オンライン会場1	オンライン会場2
<p>【分科会：A】9:00～10:50 生成系AIに対する大学対応(研修等含む)の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 東北大学 三石 大氏(東北大学データ駆動科学・AI教育研究センター准教授) ※ 近畿大学 井口 信和氏(近畿大学総合情報基盤センター長) ※ 上智大学 池田 真氏(上智大学学事センター長) ※ 京都ノートルダム女子大学 神月 紀輔氏(京都ノートルダム女子大学ND教育センター長) ※ 順天堂大学 川村 浩之氏(順天堂大学医学部一般教育准教授) 	<p>【分科会：B】9:00～10:30 企業における生成系AI活用の対応(社員教育含む)紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 生成AIを踏まえたデジタル人材育成施策の改訂について 島田 雄介氏(経済産業省商務情報政策局情報技術利用促進課調査官) ※ 社員が様々な業務に活用 向野 孔己氏(パナソニック コネクト株式会社 IT・デジタル推進本部 戦略企画総括部戦略企画部シニアマネージャー) ※ 化学素材の新規用途の探索に活用 向田 志保氏(三井化学株式会社DX推進本部DX企画管理部データサイエンスチームリーダー) ※ やってTRYプロジェクトの紹介 服部 怜奈氏(アサヒグループジャパン株式会社 Data & Innovation 室)
<p>休憩 10:50～11:00</p> <p>【分科会：C】11:00～12:00 生成系AI授業活用事例の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ ChatGPTで英語教育の在り方を探究 山中 司氏(立命館大学生命科学部教授) ※ 模擬授業を考えるグループワークにChatGPTを使用 高尾 俊介氏(甲南女子大学文学部准教授) 山下 香氏(甲南女子大学文学部准教授) 	<p>休憩 10:30～10:40</p> <p>【分科会：D】10:40～12:00 働き方改革、業務支援DX</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 職員の働き方改革宣言 (ビデオ講演) 千野 雅裕氏(上智大学院人局人事グループ主幹) ※ 国際交流業務のDX取組みと展望・課題 中村 文武氏(桜美林大学国際交流センター課長) ※ デジタル技術活用プロジェクトと業務自動化(RPA)の事例紹介 石田 宙久氏(滋賀医科大学情報課主幹)
<p>休憩 12:00～13:00 (大学・企業連携によるICT導入・活用事例の紹介)</p>	
<p>【分科会：E】13:00～14:20 学修者本位の教育、学びの質向上を目指すDXの試み</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 一人ひとりの個性を伸ばす目標・学修支援DXの取組み 田代 雄三氏(日本経済大学業務推進部長、准教授) ※ 学修課程・成果の可視化を目指した医療系DXの取組み 西村 礼子氏(東京医療保健大学学長戦略本部准教授) ※ DXによる時間・場所の制約を超えた学びの場創出の取組み 鈴木 亮一氏(金沢工業大学学長補佐、工学部教授) ※ DXによるバーチャルクラスデジタルラーニングの取組み 西村 浩二氏(広島大学情報メディア教育研究センター長) 	<p>【分科会：F】13:00～14:10 デジタル教材の著作権対応とChatGPTの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ 補償金制度における権利処理の注意点とChatGPTの対応 補償金制度の導入により、教員が授業で他者の著作物を利用することが理解され定着しつつある。他方、同一性保持権や目的外利用など著作権法で許諾されていない他者の著作物の利用方法に対する注意事項について、理解の促進をはかります。なお、著作権者個人への補償金の分配については、著作物利用情報の一元化など本協会が課題としている点を整理し、認識の共有を図ります。 また、ChatGPTの取り扱いとして、著作権侵害にどのように注意したらよいか、などについて考察します。 中村 壽宏氏 (神奈川大学学長補佐、法学部教授) 高橋 英弘氏 (京都産業大学法学部教授)
<p>【分科会：G】14:20～15:20 学びの質向上を目指すICT活用の取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ オンライン「インタカレッジ民法討論会」 高橋 英弘氏 (京都産業大学法学部教授) ※ ICTで「空き家活用」の可能性を探究する地域連携教育 高橋 大輔氏(共立女子大学建築・デザイン学部教授) ※ ICTを用いたTeam-Based Learningの実施方法 茂泉(吉名) 佐知子氏(東京女子医科大学医学部講師) 	<p>休憩 14:10～14:20</p> <p>【分科会：H】14:20～16:00 文系学生向けデータサイエンス・AI授業のワークショップ</p> <p>多学部横断的なデータサイエンス授業の実践例と生成系AIとの向き合い方 理系・文系の各学部から参加してくるデータサイエンス授業の工夫と、テキストや画像に関する生成系AIとの向き合い方について紹介します。 辻 智氏(大阪公立大学研究推進機構特任教授、本協会情報教育研究委員会データサイエンス教育分科会アドバイザー)</p>
<p>【分科会：I】15:20～16:00 メタバースによる大学授業活用事例の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ※ メタバース・ラボでの課題解決型PBLの試み 小田 まり子氏(久留米工業大学AI応用研究所副所長) ※ メタバースによる国際協働学修の実践報告 林 雅子氏(東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授) 	

(2) 実施結果

9月5日から7日の3日間、オンラインによるテレビ会議(東京市ヶ谷の私学会館から配信)により、69大学・1短期大学、3賛助会員、視聴者数は、初日に207名、翌日に300名、最終日に232名の参加があった。以下に、全体会、テーマ別意見交流で確認された主な点とアンケートによる実施結果を報告する。

1. 初日の全体会

4件の講演と1件のシンポジウムを行った。最初は、我が国の教育をめぐる現状・課題・展望の講演として、文部科学省から「新たな教育振興基本計画のコンセプトと高等教育の政策」を紹介いただき、続いて、変革の世紀と生き抜く教育を考えるとして、安西副会長から、「教育の未来を築くイノベーションの学びとは」の講演が行われた。

また、文部科学省から、国等が取組むデジタル人材の育成・確保として、「数理・データサイエンス・AI教育の推進・普及と、生成AIの取り扱い」について説明があった。

昼食後、6名の先生方による「大学教育への変革を迫る生成系AIの取り扱い」をテーマにシンポジウムを行い、初日の最後に、メタバースによる教育を考えるとして、東京大学から「新しい世界を知る機会に」と題して講演が行われた。

特に、生成系AIの取扱いのシンポジウムでは、生成系AIは知識を並べるのは得意だが、知識を創る、知識を活用する、知識を使って相互理解するという学びは苦手なので、思考・推論の仕方を学ぶことが大事になる。しかし、間違い、著作権侵害などのリスクもあるので、そういうことを体験する中で、ヒントを与えてくれるところを使って、主体的に学びを進めていく教育がより一層可能になるのではないかとということが共有された。

2. 2日目のテーマ別の意見交流

分科会Aの「生成系AIに対する大学の対応」では、5大学から教員に対する研修や学生への取扱い周知が紹介され、意見交流した。

分科会Bの「企業における生成系AI活用の対応(社員教育を含む)紹介」では、経産省で生成系AIを導入した企業での人材育成モデルの改定と企業の導入事例が紹介され、意見交流した。

分科会Cの「生成系AI授業活用事例の紹介」では、2大学から英語教育とグループワークの活用事例が紹介され、意見交流した。

分科会Dの「働き方改革、業務支援DX」では、2大学から職員の働き方改革宣言、国際交流業務のDX、業務自動化(RPA)が紹介され、意見交流した。

分科会Eの「学修者本位の教育、学びの質向上を目指すDXの試み」では4大学から、スマホによる学修支援アプリの開発、医療系DXの取組み、実空間と仮想空間を活用した実験・演習の取組み、バーチャルクラスデジタルラーニングの取組みが紹介され、意見交流した。

分科会Fでは、「デジタル教材の著作権対応とChatGPTの対応」では、保護の対象となる著作物と公衆送信での対応、補償金分配の問題、生成系AIに関する著作権上の問題について説明が行われ、意見交流を通じて理解の共有が行われた。

分科会Gの「学びの質向上を目指すICT活用の取組」では、3大学からオンラインインターカレッジ討論会、地域連携教育、TBLが紹介され、意見交流した。

分科会Hの文系学生向けデータサイエンス、AI授業のワークショップでは、「他学部横断的なデータサイエンス授業の実践例と生成系AIとの向き合い方」が紹介された。

分科会Iの「メタバースによる大学授業活用事例の紹介」では、2大学から課題解決型PBLの試み、国際協働学修の実践報告が紹介され、意見交流した。

3. 3日目のICT利活用の発表

39件(当日発表中止1件)の教育改善を目的としたICT利活用の発表が行われた。

4. 参加者アンケート

(1) 全体会について

- ・ 国の方針と、生成系AIの大学における取扱いの全体像が聴けたので参考になった。
- ・ 生成AIの導入による教育現場での取組みと、これからの時代が求める人材育成のノウハウの実例を学べる機会となりました。
- ・ 授業での生成系AIの扱いについて、方針をきちんと示す必要があると感じた。「考える」へつなげる方法が大切だと実感する。

- ・ デジタル人材の育成・確保について、十分な情報が得られたため、非常に勉強になった。また、生成系 AI に関する教育も、早急に取り組む必要性を感じたため、来年度に向けて検討中である。
 - ・ DS と AI の今後について強烈なパワーと進化を強く予感しました。特に、VUCA の時代と言われる現在と今後本学が進むイバラの道を灯す希望が持てました。
- (2) 分科会について
- ・ 分科会 A の生成 AI に対する大学対応の 5 大学の実践内容が、大変興味深く拝聴しました。
 - ・ 分科会 B の企業における AI への対応事例を知ることができ、これらの事例を教育活動に展開したい。
 - ・ 分科会 C の ChatGPT を用いた様々な授業を知れて良かった。
 - ・ ChatGPT に関する具体的な手法をいくつか聞かせていただき参考になりました。
 - ・ 分科会 D でこれからの大学職員の業務がどのように変化していくのか、参考とさせていただける情報提供であった。
 - ・ 分科会 F のデジタル教材の著作権対応と ChatGPT の対応について、大変勉強になりました。特に、卒業後に社会人として生成系 AI の取り扱いについて、十分な知識を持たせておく必要性について痛感した。
 - ・ 分科会 G の ICT で「空き家活用」の可能性を探究する地域連携教育が参考になった。
 - ・ 分科会 H の文系学生向けデータサイエンスについて興味深いお話を伺うことができました。
 - ・ 分科会 I の仮想空間で個別対応することで質問者が増えた点は興味深かった。
- (3) 発表会について
- ・ 様々な事例に触れることができ、参考にできる事例もあり有意義であった。
 - ・ 各大学の取り組みが分かり、今後の方針を立てる上で役にたった。
 - ・ A-1 では生成 AI を用いて自己分析をするという活用法を知ることができました。
 - ・ 各教科、特に英語教育における教育改善&ICT 利活用は参考になりました。
 - ・ 各大学の AI・CHATGPT と共存していくためのアプローチ方法を知ることができた。
 - ・ A グループを中心に参加させて頂いたが、実践的な取り組みが多く、参考となるものが多かった。来年度も参加する予定なので、経年結果を楽しみにしている。
 - ・ 質問が少ないようで、もう少し意見交換を活発にするよう誘導していただいてもよかった。
- (4) 大学・企業による ICT 導入・活用事例紹介ビデオについて
- ・ もっといろいろな企業の情報提供があった方が良かった。
 - ・ 時間の関係で視聴できなかったため、オンデマンドで視聴できるよう動画を置いてほしい。
 - ・ 休憩時間は休憩で過ごしたい。午前の最後の時間帯 15 分を活用してどうか。
 - ・ 休憩時間に流すものとして節度もあり、良かったと思います。
 - ・ 音声のボリュームが小さかったものがあり、よく聞き取れなかった。事前にテストをしておいて欲しい。
- (5) 今後希望するテーマ、開催案内方法へのアドバイス、お気づきの点について
- ・ 優秀な学生の能力を引き延ばす取り組みについて聞いてみたい。
 - ・ 1 年後時点での「AI とウェルビーイング」についての実績や今後。どのくらい景色(展望)が変わって(進化)いるかに興味があります。
 - ・ 個別の授業の取組等参考になる点もあったのですが、大学全体が AI に対してどのように向き合っていくかなどの観点から、聞ける話がもう少し充実しているとよいなと思いました。
 - ・ 今回のテーマが私にとってとても関心があるテーマであったため、経過報告のような話をきければよいと思う。
 - ・ 次年度もオンライン開催を希望します。

なお、開催結果の詳細は、巻末の 2023 年度事業報告書の附属明細書【2-6】を参照されたい。

5-2-2 短期大学教育改革 ICT 戦略会議

<事業計画>

短期大学生の社会人基礎力の強化、短期大学のプレゼンス向上を促進する事業として、複数の短期大学と自治体等が協働する地域貢献支援活動のコンソーシアムを本協会ネット上に形成し、教育を通じた「高齢者との交流促進・課題解決策の支援事業」、「地域価値発見の支援事業」、「地域課題取組情報共有の支援事業」のモデルを探究・策定するため、試行事業における成果を踏まえて、支援事業のニーズ及び教育効果、運営上の課題を共有し、推進普及に向けた対応策等について協議する。また、話題提供として、地域専門人材の育成に向けて主体的・協働的に学ぶ Active Learning、課題解決型学修の Problem Based Learning、学びを社会に還元する Service Learning などを通して、予測困難な時代に幸せに生きるための力を身につける取組み事例などの紹介を行う。

<事業の実施状況>

「短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会」に加えて、地域貢献支援活動のコンソーシアム校の協力を得て教育による地域貢献活動を試行した。以下に、委員会の活動状況について報告する。

短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会

令和5年6月26日、7月10日、8月4日、9月20日、令和6年3月15日に運営委員及び短期大学地域貢献支援活動コンソーシアム参加教員の平均9名が出席して5回開催し、短期大学教育改革 ICT 戦略会議の開催要項策定、会議の進め方、コンソーシアム試行事業の実施と生成 AI の活用を取り入れた来年度試行事業の企画、コンソーシアムプラットフォームの整備などを検討した。

(1) 開催要項の策定

開催趣旨は、短期大学と自治体又は地域社会等が協働する地域貢献支援活動の効果的な在り方を探求するため、私立短期大学のコンソーシアムで試行した成果を報告した上で、現在学生主体ですすめている ChatGPT を活用した支援事業の取組みや構想を踏まえて、短期大学コンソーシアムで学生が連携して試行する地域貢献支援活動のニーズ及び教育効果、運営上の課題を共有し、推進の可能性等について協議することにした。

プログラムは、最初に話題提供として、主体的・協働的に学ぶ AL、課題解決型学修の PBL、学びを社会に還元する SL によって「予測困難な時代に幸せに生きるための力を身に付ける短期大学教育改革の事例紹介」を行う。その中で、将来を思い描くための体験を学生自身が自分で学びをデザインする2か月間のセルフデザイン・チャレンジ(地域でショップを運営、新しいレシピを考案など)のプログラムを紹介いただくことにした。

次に、コンソーシアム活動の報告として、「高齢者支援事業を目指した世代を超えた交流活動の成果と生成系 AI を活用した試行」、「地域価値発見支援事業を目指した真珠価値探求プロジェクトの成果と生成系 AI を活用する構想」、「短期大学コンソーシアムプラットフォームの紹介」を行うことにした。

その上で、全体討議として、「短期大学コンソーシアムによる地域貢献支援事業の活動を考える」テーマに、地域短期大学等の特性や学生の発想を拓げる手段として Zoom、生成系 AI などを用いた創造的な地域貢献支援事業の有用性と推進策の方向性について、問題提起に基づき意見交流を行い、最後に総括することとし、以下のように開催要項決定した。

～短期大学生による地域貢献支援活動の推進～
2023 年度 短期大学教育改革 ICT 戦略会議開催要項
オンライン開催

日 時 : 令和 5 年 9 月 2 日 (金) 13:00~16:30
配信場所 : アルカディア市ヶ谷 (東京、私学会館)
主 催 : 公益社団法人 私立大学情報教育協会
参加対象 : 私立の短期大学学長、学科長、事務局長、短期大学の教員・職員、FD 及び教育支援・学修支援関係者
開催方法 : オンラインによるテレビ会議室 (Zoom 使用) とします。申込者には一週間前にメールでテレビ会議室専用の URL をお知らせします。

開催趣旨

短期大学生の社会人基礎力の強化、短期大学のプレゼンス向上を促進する事業として、教育研究を通じて短期大学と自治体又は地域社会等が協働する地域貢献支援活動の効果的な在り方を探求するため、私立の短期大学コンソーシアムで試行した支援事業の成果を報告するとともに、現在進めている取組みとして、学生主体ですすめる ChatGPT を活用した支援事業の取組みや構想を踏まえて、支援事業のニーズ及び教育効果、運営上の課題を共有し、推進の可能性等について協議します。また、話題提供として、地域専門人材の育成に向けて主体的・協働的に学ぶ AL (Active Learning)、課題解決型学修の PBL (Problem Based Learning)、学びを社会に還元する SL (Service Learning) などを通して、予測困難な時代に幸せに生きるための力を身につける教育改革事例の紹介を通じて、持続可能な社会の創り手の育成について、理解の共有を目指します。

プログラム

13:00 開会挨拶 短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会 戸高 敏之委員長

13:05 話題提供

「予測困難な時代に幸せに生きるための力を身につける短期大学教育改革事例の紹介」
主体的・協働的に学ぶ AL、課題解決型学修の PBL、学びを社会に還元する SL によって、予測困難な時代に必要とされる「共愛短大 10 の力」を身につけられる取組みや、本年度からスタートしたクォーター制 + セルフデザイン・チャレンジの試みなどについて紹介します。

発表者 共愛学園前橋国際大学短期大学部学長 大森 昭生氏

14:00 本協会がすすめる地域貢献支援事業の必要性

短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会 戸高 敏之委員長

14:05 コンソーシアム活動報告 1 (質疑含む)

「高齢者支援事業を目指した世代を超えた交流活動の成果と生成系 AI を活用した試行」

説明者: 実践女子大学短期大学部 三田 薫氏 (短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会委員)

山野美容芸術短期大学 及川 麻衣子氏 (コンソーシアム参加校)

14:50 コンソーシアム活動報告 2 (質疑含む)

「地域価値発見支援事業を目指した真珠価値探求プロジェクトの成果と生成系 AI を活用する構想」

説明者: 奈良工業高等専門学校 治京 玉記氏 (短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会委員)

(元大阪夕陽丘学園短期大学)

別府大学短期大学部 後藤 義友氏 (短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会委員)

〃

衛藤 大青氏 (コンソーシアム参加校)

和泉短期大学

深町 和哉氏 (コンソーシアム参加校)

15:25 コンソーシアム活動報告 3 (質疑含む)

「短期大学コンソーシアムプラットフォームの紹介」

説明者: 清和大学 西岡 健自氏 (短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会委員)

15:35 全体討議

「短期大学コンソーシアムによる地域貢献支援事業の活動を考える」

地域の創生・活性化につなげていく地域貢献支援活動に短期大学等のコンソーシアムを介して、地域短期大学等の特性や学生の発想を拓げる手段として Zoom、生成系 AI などを用いた創造的な地域貢献支援事業の有用性と推進策の方向性について、問題提起に基づき意見交流を行います。

問題提起者: 志学館大学 大重 康雄氏 (短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会委員)

※ 生成系 AI を活用した支援事業のニーズ、コンソーシアム活動の課題を整理

16:25 総括 短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会 戸高 敏之委員長

16:30 終了

(2) 会議の進め方

- ① コンソーシアム活動報告の進め方は、高齢者支援事業、地域価値発見支援事業とも昨年度実施の成果を発表することにした。

その上で、高齢者支援事業では、生成系 AI を活用した本年度試行の「かるた会」、「ショートストーリー発表会」に ChatGPT を用いて読み札の下書き、イラストの作成、象徴的な生活・社会現象を高齢者から聞き出しショートストーリーとして下書きした実践体験の活動報告を行うことにした。

地域価値発見支援事業では、「地域の特産品を用いたアレンジレシピを ChatGPT を活用して考え、それを SNS 等で発信していく」をテーマとする試行事業の活動計画を紹介することにした。具体的には、SNS で情報発信する際の効果的な方法（キーワード検討、写真技術、画像編集）、食材の特徴や他の食材との組み合わせ、調理方法や新たな加工方法、新しいレシピのなどのアイデア出しに ChatGPT を用いて解決する構想を紹介することにした。

- ② 全体討議の進め方について、問題提起では、ChatGPT 利活用による地域貢献支援活動の効率化と質向上を目指すことにした。意見交流では、全体討議で認識を共有する視点として、学びを社会に還元し、社会体験を実践する中で学びを振り返り知識を知恵に転換するサービ斯拉ーニングの推進を確認した上で、短期大学コンソーシアムによる地域貢献支援活動のニーズを確認する。その上で、本協会のコンソーシアムによる地域貢献支援事業に対する参加の可能性を打診するとともに、地域貢献支援事業を普及推進するための課題と対応策を整理することにした。

(3) コンソーシアム試行事業の実施と生成 AI を活用する構想の企画

「高齢者支援事業」

- ① 高齢者支援事業では、コンソーシアム試行事業として、学生と異世代の相互理解促進を目指し、Zoom や対面で話す以上に相互を知る方法を探ることと、生成 AI やアプリを活用して、カルタの制作とカルタ大会の実施、ショートストーリーの制作と発表会を実施することになり、実践女子大学短期大学部は正課授業、山野美容芸術短期大学は課外活動で参加した。
- ② カルタの制作とカルタ大会のテーマは、健康、美容、食生活とし、5月に読み札募集、6月に絵札のイラスト制作、7月20日にかるた大会を実施した。読み札制作は、山野美容芸術短期大学(10句)、実践女子大学短期大学部(5句)、実践女子大学生活科学部(5句)、高齢者の民間団体である baba lab(10句)、地域デビュー楽しみ隊(10句)で役割分担した。絵札制作は、無料グラフィックデザインツール(Canva)を使用し、Canva 使用法の動画オンデマンドの配信は実践女子短期大学部の学生が提供し、絵札のイラストは2短期大学、1大学の学生が分担した。また、ChatGPT を用いて読み札を考える場合は、生成した「かるた」の語句について、ネット上で同一語句の有無を確認させた。
- ③ ChatGPT や Canva の使い方説明会は、6月8日に「高齢者向けカルタのカード作成法説明会」を Zoom で行った。同15日に「他大学学生向けカルタのカード作成法説明動画」を作成し、オンデマンドで共有した。
- ④ 高齢者の読み札と学生制作のイラストについては、高齢者ならではの視点、学生ならではのイラスト発想が活かされた。学生の読み札と学生制作のイラストでは、美容専門、食をテーマなど学生ならではの視点が活かされた。
- ⑤ カルタ大会は、7月20日に実践女子短大生15名と高齢者4名で実施した。学生のアンケートでは、「自分では思いつかないようなこともどんどんアイデアを出してくれるので、よかったです。」、また、高齢者からは、「一生懸命に学生さんが教えてくれて大変有意義な時でした。説明も上手でした。ChatGPT や Canva の使い方がよく分かりました。AI が考えるもの、人の手が入るものの区別がつかないのですが、実際に体験することでよく分かりました。」、「カルタの完成度が高いなと思います。こうしたことができるのであれば、応用としていろいろできるのだろうなと感じます。」との感想が寄せられた。
- ⑥ ショートストーリー発表会は、7月6日に学生15名、高齢者8名が参加し、Zoom ミーティングした。学生が現在夢中になっていることのショートストーリー、異世代者のキーワードを基に作成したショートストーリー作りでは、ChatGPT で簡単には良いストーリーが作れないこ

とから、何度も問いかけることで生成系 AI 活用技術を高める機会となった ChatGPT が生成したストーリーの下書きについて、「発表会」で Zoom を介して高齢者から意見をいただいた。学生からのアンケートでは、「自分で 1 から全て考えるとなると莫大な時間がかかるようなストーリー作りのようなものでも、ChatGPT を使うことで手軽に作ることができる点が良いと思いました。」、「ChatGPT に貰った回答をそのまま使うのではなく、何度も質問し、よりいい作品となるように試行錯誤することが大事。」、また、高齢者からは、「生成系 AI 活用にあたっては、必要かつ十分なキーワードの準備、自分自身で結果の検証(内容的に不適切部分の再確認等)がとても重要かと思います。」、「今回は我々が教えてもらうことがあり、大変有意義でした。相互に教えあうというのが異世代交流ではいいと思います。」との感想が寄せられた。

- ⑦ まとめとして、「ChatGPT と Canva の活用により活動時間の短縮となり、学生があまり負担を感じることなく活動が可能になった。」、「カルタもストーリー作りも、学生と高齢者が一方通行ではなく相互に貢献する有意義な場となった。」、「ストーリー作りは、何度も ChatGPT に問いかけなければよいものがないため、学生にとってプロンプトエンジニアリングのトレーニングの場となる。」など生成 AI や各種アプリを活用することで、学生と高齢者の「協働作業」が実現し、相互理解、相互支援の機会となることが確認された。

「地域価値発見支援事業」

- ① 地域価値発見支援事業では、短大生には行動力や地域志向というアドバンテージがあるが、時間が無く経験も少ない。そこで、ChatGPT などの生成系 AI を活用すれば、学生の経験不足を補い、時間短縮が可能となることから、これまで教員サポートが必要とされていた活動内容を、短大生が ChatGPT を活用して乗り越え、短大生だけでプロジェクトを進めるための事例と方法を蓄積することを検討している。
- ② 想定する活動例としては、「地域の特産品を用いたアレンジレシピを ChatGPT を活用して考え、それを SNS 等で発信していく」を構想している。
- ③ 活用場面例のイメージとしては、一つはプロジェクトのステークホルダーや地域課題の多面的分析、二つはチーム活動支援(役割分担、スケジュール)が考えられる。
- ステークホルダーや地域課題の多面的分析では、地域の特産品のレシピ開発と SNS 発信には、さまざまな関係者(ステークホルダー)に、協力してもらう必要があり、関係者ごとに、どういった協力をしてもらう必要があるか ChatGPT を活用して検討する。
- 例えば、「私たちは栄養学を学ぶ学生です。地域の特産品を用いたアレンジレシピを考え、それを SNS 等で発信していく活動に取り組む場合、どのようなステークホルダーを考慮する必要がありますか。また、各ステークホルダーに私たちに関わる場合にどのような観点でどのような計画を立てればよいでしょうか、一覧表にまとめて示してください。」といった質問を行い、それぞれに対して考慮すべき観点、計画をまとめる。
- チーム活動支援(役割分担、スケジュール)では、例えば、「今回のプロジェクトは学期末に成果発表となります。この 10 人でプロジェクトを進めるための、役割分担とスケジュールを検討しましょう。」といった質問を行い、一覧表形式でプランを提案する。
- ④ SNS で情報発信する際の効果的な方法、キーワード検討、写真技術、画像編集について ChatGPT で解決する食材の特徴や、他の食材との組み合わせなどについてのアイデアを ChatGPT で検討する調理方法や新たな加工方法、新しいレシピのアイデアを ChatGPT で検討する等、ChatGPT へのプロンプト(質問・作業指示)の工夫やそれによる出力の検証の体験を加速し、生成系 AI を使いこなすスキルを身に付けるさせることで、学生の主体性を引き出す効果を期待している。また、学生の語彙力・質問力の向上と、議論の活性化や教員負荷の軽減の効果を期待している。
- ⑤ ChatGPT の活用への課題(教材化)として、ChatGPT の使い方「ガイドンス資料」(準備方法、使い方・手順、質問例・出力例、出力の評価方法)を作成している。また、ChatGPT によるプロジェクト推進のモデルを考えている。

(4) コンソーシアムプラットフォームの整備

プラットフォーム上に、地域課題に対する各短期大学の支援事業の取り組み状況、支援事業の内容・成果、関連する教育活動のノウハウ・評価等、プラットフォームの使用方法を掲載・共有して、地域貢献支援に対する理解の促進と推進普及に活用することを目的としている。Google の提供するクラスルームを使用し、動画/音声付レポートなど任意の形式の情報を容易に登録・整理可能、登録情報は、コンソーシアムのメンバーからいつでも容易に参照可能、・公開する情報の総量に制限なし、登録した情報のセキュリティは Google が確保する(不測の事態に備えて、

クラスルームに掲載した情報は保存しておく必要がある)、会員短大ではサーバなどの設備の準備不要(Google Chrome から使える)、私立大学情報教育協会が Google の非営利団体向けアカウントを所有しており、会員短大では他の Google のサービスが無償享受できるようにしてある。

(5) 実施結果

参加者は、71 名(一般 60 名:14 短期大学、3 大学、発表者等 9 名)であった。以下に、2023 年度短期大学教育改革 ICT 戦略会議の開催結果の概要を報告する。

1. 共愛学園前橋国際大学短期大学部の話題提供で理解が進んだ主な点

- ① 「予測困難な時代に幸せに生きるための力を身につける短期大学教育改革事例の紹介」では、短期大学で学ぶのは、知識や技能、資格だけではなく、2 年間で社会に育てられる人から社会を支える人になり、幸せな生涯をおくるための力を身につけてほしいという学びの意義を掲げ、アクティブラーニング、地域連携活動を推進することで、地域からの信頼・期待が高まり、結果として学生募集にもつなげていくことができた。その中で、2 年間で資格をとり、コンピテンシーを身に付け地域との関係性をより深めていくジレンマをどう解決しようかということで、今年から始めている 4 学期制(クォーター制)を導入した。
- ② 12 月から 1 月の第 4 タームの 2 か月間に一切授業をしないという期間を生み出し、セルフデザイン・チャレンジとする取組みを位置付けた。自分の在り方やキャリアを考えながら、自分の興味・関心に応じて、自分で学びを作っていく、いわゆる体験的な学びを自分でデザインし、それに取組んだ結果を報告するというので、コンピテンシーを高めていく学びになると思っている。1 年生全員の必修としており、4 月から 7 月の第 2 タームまでに自己分析と将来像、体験計画の企画を立てる、10 月・11 月の第 3 タームまでに計画の調整、交渉し、第 4 タームの 12 月・1 月に体験活動を行う。春休みの 2 月・3 月に活動をまとめ発表会を行うことにしている。活動時間は概ね 10 日間から 20 日間、無給で行い、全教職員に相談などができる体制にしている。

2. 本協会がすすめる地域貢献支援事業の必要性、コンソーシアム活動報告で理解が進んだ主な点

- ① AI や全てのモノがインターネットでつながるデジタル社会では、新たな価値を創造することで、人々の暮らしや社会に大きな変革をもたらすことが想定されており、一人ひとりが、それぞれの立場で自からの問題として捉え、課題解決などにかかわれる人材の育成が要請されている。しかし、一つの短期大学で進めるのには限界があることから、それぞれの短期大学の強みや特性を活かしながら、多様な観点から問題を深堀し、分野横断的に課題を探究する実践体験として、地域社会の発展に貢献する学びの訓練が大事になる。そのような観点から、本協会では高齢者を支援する事業を目指した世代を超えた交流活動と、地域価値の発見を支援する事業を目指したプロジェクト活動について、3 年前より情報通信技術を駆使して試験的に進め、その成果を広くプラットフォームで紹介し、多くの短期大学で導入できるよう課題や教育方法のノウハウを公開している。
- ② 生成系 AI が出現したことにより、それを材料に議論を重ねることで、質の高い課題探求の学びが期待できるのではないかと。生成系 AI によるリスクから逃げるのではなく、教育の中で体験を積み重ね、使いこなしていけるように、社会人基礎力を身に付けさせることが重要かと考えている。未来を担う若者が社会で困らないように、実践体験型の教育プログラムを通じて失敗や躓きを経験する中で、アウトプット型の学びを短期大学として、推進・普及していくことを期待している。
- ③ コンソーシアム活動報告 1 の「**高齢者支援事業を目指した世代を超えた交流活動の成果と生成 AI を活用した試行**」

実践女子大学短期大学部と山野美容芸術短期大学が連携して、3 年前から Zoom を用いて高齢者による団体と異世代交流活動を継続した。2021 年度は、ブレイクアウトルームで学生数名に対し異世代者 1 名から 3 名が入り、相互に 1 分プレゼンを行った後、意見交換を行い、実施後に活動の成果と課題についてインタビューを行った。2022 年度は、インタビュー動画制作を行い、2 キャンパス合同で学生が動画の構成、撮影、編集方法を学習し、自ら製作した作品を発表し合う機会を設けた。短い時間での交流のため、内容が限定的になった。

活動から見えてきた課題は、休み時間の短縮や学生のスケジュール過密、専攻別時間割の違いなどから、課外活動としての活動に制限があったため、昼休みの短時間での活動とし

た。実践と山野の学生、高齢者を繋ぎ、動画制作の専門家との調整も必要となるため、スケジューリングは困難を極めた。課題を克服するために、オンデマンド、オンライン、クラウドに動画保存といった方法を組み合わせた。また、動画を YouTube 公開し、予め視聴するなどの工夫も行った。

2023 年度は、過去 3 年間の経験、実績を踏まえて、高齢者の感想をいただくという活動から互いを深く知る機会を作っていくとともに、生成系 AI やアプリも積極的に活用して、学生が体験する中で慣れていくことも考え、一つは学生と高齢者によるカルタの制作とカルタ大会、もう一つはショートストーリーの制作と発表会という新しい取組みを、実践では正課授業の中で、山野では課外活動として実施した。カルタの制作では、フレイル予防や健康寿命の延伸に寄与できるよう、健康、美容、食生活の読み札の製作を高齢者の 2 団体にも依頼し、2 短期大学、1 大学、2 高齢者団体で制作した。その際に学生が ChatGPT の使い方を説明する機会を高齢者に向けて設け、高齢者にも体験していただき、その上で絵札の製作を無料アプリで学生が行った。

生成系 AI や各種アプリの活用は、学生の負担軽減に有効であるとともに、他校の学生とオンデマンド動画等で情報共有することで、学生自身の情報リテラシーの向上が期待される。カルタプロジェクトでは、健康や美容など世代による異なる問題や興味について理解を深めることができた。また、ショートストーリープロジェクトでは、互いの世代の人生について思いを馳せ、相互理解する機会となるなど、生成系 AI や各種アプリの活用は、学生と高齢者の「協働作業」が実現し、相互理解、相互支援の機会とすることができた。

④ コンソーシアム活動報告 2 の「地域価値発見支援事業を目指した真珠価値探求プロジェクトの成果と生成 AI を活用する構想」

真珠価値探求プロジェクトによる地域価値発見支援の成果報告と、生成系 AI を活用する地域価値発見支援の構想について報告した。

「真珠価値探求プロジェクト」は、真珠需要の低下に伴う新たな真珠価値を見出す必要性が高まっていることに鑑み、2022 年度に志学館大学(鹿児島県)、別府大学短期大学部(大分県)、大阪夕陽丘学園短期大学(大阪府)、和泉短期大学(神奈川県)からなるコンソーシアムを構成し、学びの協同化を通じて従来の流通に乗らない規格外真珠や貝殻の新しい価値の発見に取り組み、地域価値の創生に繋げることを目指した。3 校の短期大学と 1 大学の支援で Zoom と Google Classroom を活用することで、2022 年 11 月から 2023 年 3 月上旬にかけて 6 回に亘り、課外授業として 6 名の教員全員によるファシリテータ支援のもとで実施した。4 回のオンライン交流では、回を追うごとに各校とも他校のプレゼンテーションに刺激され、地域性や学科特性がブラッシュアップされた。その結果、大阪夕陽丘学園短期大学では真珠酢を使った洋菓子の制作、和泉短期大学では幼児保育目線でのマラカスや貝殻のペン立て制作、別府大学短期大学部では地域特性を生かしたプレゼンテーションから入浴剤の開発を行い、真珠のパウダーと湯の花、チキン南蛮などが制作された。総括では、分野横断的なコミュニケーションを通じて、「学びの連鎖」や、「学びの化学反応」という学生への新たな価値発見というものも見出すことができた。

「生成系 AI を活用する地域価値発見支援の構想」は、時間が足りないこと、幅広い知識、経験が不足していることから、教員サポートが必要になり、結果として教員負担が大きくなりがちになる課題に対応するため、生成系 AI を活用することで、学生の経験不足を補い、時間を短縮し、教員の負担を下げつつ、結果的に学生主体の活動を実践できるのではないかと考えるから、生成系 AI を用いた地域価値発見の支援構想を検討することになった。

一例として、地域の特産品を用いたアレンジレシピを ChatGPT を活用して考え、それを SNS 等で発信していくことを考えている。活用場面のイメージとして、例えば、地域の特産品のレシピ開発と SNS 発信には、さまざまな関係者(ステークホルダー)の協力が必要になることから、関係者ごとにどういった協力をしてもらう必要があるかを検討する手段として、ChatGPT を活用することを考えている。もう一つの例として、チームでプロジェクトを進めるための役割分担とスケジュールの支援に ChatGPT を活用するなどの例が考えられる。ChatGPT 活用の効果としては、教員負荷の軽減、学生の自主性・自発性の伸長、学生の語彙力、質問力の向上と議論の活性化を期待している。なお、ChatGPT に適切な質問をする際、自分たちの課題をうまく言語化する必要があることと、ChatGPT の回答を評価するために、学生同士による議論が必要になる。

課題としては、一つは ChatGPT の使い方や地域価値支援事業の活動に、使いやすい質問例や出力の評価方法をまとめた教材(ガイダンス資料)が必要と感じている。もう一つは、学生がうまく課題を言語化し、ChatGPT の回答を評価し、その結果に基づいて議論を進めたり、教員の支援を求めたりした上で、次の新たな課題に向かうというサイクルをうまく回していくプロジェクトの推進モデルの仕組みが大事になると考えている。事例の蓄積が進めば

教材化を進め、多くの短期大学でノウハウを共有できると考えている。

⑤ コンソーシアム活動報告 3 の「短期大学コンソーシアムプラットフォームの紹介」

プラットフォーム上に、地域課題に対する各短期大学の支援事業の取り組み状況、支援事業の内容・成果、関連する教育活動のノウハウ・評価等、プラットフォームの使用方法を掲載・共有して、地域貢献支援に対する理解の促進と推進普及に活用することを目的としている。プラットフォームの形態は、情報を掲載・共有するツールとして、Google クラスルームを使用する。私立大学情報教育協会が Google for Education (非営利団体向けアカウント) を持っており、Google for Education の提供するすべてのサービスはコンソーシアムの会員は無償で利用できる。コンソーシアムの会員は、コンソーシアムから Google for Education のアカウント(メールアドレスと変更可能なパスワード)を個別に取得し、クラスルームを使用できる。動画・音声付きレポートなどの任意の形式の情報を簡単に登録・整理ができる。それから登録情報はコンソーシアムのメンバーからいつでも容易に参照可能。会員になるとメールアドレスとパスワードが事務局から提供されるので、コンソーシアムのプラットフォームに簡単にアクセスできる。情報量は今のところは制限がないと Google は言っている。それから、登録した情報のセキュリティは Google が責任をもって管理してくれるが、プラットフォーム上に掲載した情報は掲載した短期大学で保存しておくということが必要と思う。サーバなどの設備の準備は全然不要である。

3. 全体討議で理解の共有・確認が得られた主な点

① 問題提起「生成 AI を活用した支援事業のニーズ、コンソーシアム活動の課題を整理」

学生主体による地域価値探求プロジェクトを進めるには、広範囲かつ専門的な地域の課題を効果的に迅速に把握し、課題発見・課題設定に時間をかけて課題解決を行えるよう生成系 AI(ChatGPT)の積極的活用が重要な鍵となる。生成 AI を利用して、ネット上から膨大な情報を収集し、情報分析や提案素案作りに活用する機会が今後飛躍的に増えてくる。チャット形式で必要な情報を絞込み、AI の力を借りて極めて短時間で効率的に一定の文書が生成できるので、コミュニケーションの活性化とその質向上が図られ、「議論の場」が飛躍的に広がることが望まれる。学生主体の「学びの場」としての、地域貢献支援事業を実践的かつ確かな内容としていくためには、ChatGPT をはじめとする生成系 AI を使いこなす学修プログラムを内在した地域価値探求プロジェクトを展開し、そのプラットフォームで大きく「議論の場」が広がって行くことを期待している。

② 意見交流

意見交流に入る前に地域社会と連携した学びの仕組みとして、学生が教室で得た知識を地域社会の支援活動に活用する実践体験型の学びとしての「サービス・ラーニング」の事例紹介が行われた。

②-1 「サービス・ラーニング」を導入している短期大学の事例として、共立女子短期大学では、「課題解決型授業」と「社会活動」を組み合わせるサービス・ラーニングとして、地域社会のボランティア活動への参加を公募し、プログラム終了後、活動状況を短期大学として審査し、教養科目「自己開発」2 単位が認定されている。対象は、4 年生大学の 2 年・3 年と、短期大学の 1 年生としており、短期大学では前期出席率が 75%以上の学生としている。イベントについて教室で事前に【学び】、知識を活かして現場でボランティア活動を【体験】して理解を深め、体験を通して得た知識や気づきから課題の解決案をまとめ、連携先に【提案】し、最後に自分たちの学修活動を【振り返る】ことで、「共立リーダーシップ」を身に付け、新たな視座を得ることを目標にしている。

清泉女学院短期大学では、国際コミュニケーション科の演習として 2 年生を対象に、事前学修を通じて準備を行い、経験を通して考えたこと・学んだことをレポート化し、最終的な成果を発表する。現在は、視覚障害の方たちとの活動を予定しているとのことで、土日や授業時間外に行うことがある。成績評価方法は、事前学習課題が 30%、活動の計画と活動報告書が 30%、期末レポートが 20%で、成果発表は 20%としている。

②-2 サービス・ラーニングのような実践体験による課題探求教育プログラムの必要性については、参加者の 5 割程度の賛同が得られ、社会活動を組み合わせたサービス・ラーニングについて前向きに捉えていただいていることが分かった。

②-3 地域社会の貢献支援活動の在り方として、有志による短期大学が連携し、強みや特性を組み合わせた短期大学同士による教育連携の必要性については、5 割程度の賛同が得られ、短期大学による連携が必要と考えていることが分かった。

②-4 希望する学生を対象に地域社会の活動に参加することを通じて、自分事の問題として

どのように考えるか提案・発表させる課題探求型の学びを教育プログラムとして単位化していく時の課題や対策について意見・感想を求めたところ、次のような発言があった。

- * 2022 年度までの 3 年間は全て課外活動として短期大学同士で連携してきたが、昼休み時間の短縮、学生の授業の過密がある中で、コロナ禍では自宅から Zoom で交流がしやすかった。しかし、対面で学生たちがキャンパスに戻ってからは、Zoom も使いにくくなり、課外活動の学生募集もかなり大変で私情協のコンソーシアム活動も年々厳しくなってきた。今年、一つの授業を正課授業とすることで、教員も学生も無理なく参加できる体制が整ってきた感じがするので、単位化することは、一つの良い方法ではないかと感じている。
- * ゼミの中で高齢者から古着を預かり、リメイクする地域貢献活動をしているが、学生はビジネス系で服飾などの知識もなくリメイクを考えているが、生成系 AI を使って何か新しいアイデアや早くにいろいろなリメイクができたりするのかなと思い、早速試してみようと思った。
- * 地域に健康食生活の充実ということで地域の食堂とタイアップし、学生が健康的なメニューを開発して提供する。地域企業の食堂にメニューを提案してメニュー化するなどの活動をゼミの単位として活動している時には熱心に地域の課題に向き合っているが、ゼミが終了してしまうと熱が下がるという単位化の問題を感じていたことがある。学生たちの主体的な学びを生成系 AI などのツールを使いながら活性化させていくことに貴重な示唆を得られたと思う。なお、実際の活動をしている時に問題解決の示唆が得られるような機会をプラットフォームでは構想されていないのか尋ねたい。
- * コンソーシアムの会員に登録されれば対応できるので、検討いただきたい。
- * 2 年間という短い期間でしかも就活対策の準備をしていくとなると、学びの時間が取れないという問題が生じる。しかし、意欲のある学生には、大学として夏季休暇などを利用して、課題探求型のサービス・ラーニングを何らかの方法で実現することは、学生と社会のウェルビーイングにつながるから、大学として看過できないのではないと思う。一人でも二人でも社会と接続した学びを体験し、地域社会の未来を支える若者に対して、最良の教育を提供していくことが短期大学には期待されるのではないかと考える。

②-5 地域貢献支援活動の成果を迅速かつ質的に高めることに貢献できなければ、社会の期待に応えることができなくなる。効果的に対応していくには、どのようにしたらいいか意見を求めたところ、次のような意見があった。

- * 都市部に向けて労働者、学生が出ていってしまうので、効率化を進めるために地域の企業はデジタルトランスフォーメーションをどのように地域に広げるかということ、自治体も併せて必死に対応している。生成系 AI の使用で大幅に労働コストが下がり、少子高齢化の一つのバツファになる。また、持続可能性が社会課題になっており、企業の社会的責任ともなっている。在学中に地域貢献活動のプラットフォームで、ChatGPT を使いこなしながら、議論するという体験は社会に出てから大きなアドバンテージになると思う。使い慣れない学生にも、入り口としてのガイダンス的なテキストを用意することで、DX 時代に学生が生き残るための一つの大きな体験になる。地域貢献支援活動の成果に ChatGPT が持ち込まれたということに、大きな意義があると思う。
- * ChatGPT の使い方ガイド資料は、もうすぐ教材として提供できるのか、伺いたい。
- * 学生に使わせてプロトタイプを作り始めている。学生に見せて、分かりにくいところは改善してブラッシュアップを考えている。どんどんできたものは、プラットフォームの中で共有できればと考えている。

②-6 支援活動に生成系 AI を使って情報を広く収集して、専門的な知見の整理やアイデアを出していく中で、学生同士がどのような課題解決策を選択するのか、他大学の学生と意見を交えて議論していくことが大事で、デジタル社会を生き抜いていくためには、このようなことが非常に大きな訓練になるのではないかと考える。課題解決型のサービス・ラーニングを推進する教育プログラムの一つとして、本協会が進めている短期大学コンソーシアムの地域貢献支援事業について、今後参加を検討してもよいと考えている方について尋ねたところ、3 分の 1 程度の賛同が見られた。

4. 総括

今、私達はデジタル革命の真ただ中におり、日々、社会や生活に変化が顕著になりつつある。教員の方々でさえも体験したことがない超スマート社会が展開しつつあり、利便性が高まる一方、安心に不安を感じる社会が展開しつつある。

そのような変革の時代にあって、未知の時代を生き抜く学生に、短期大学はどのような力を持たせることができるのであろうか。短期大学生の豊かな感性、社会の役に立ちたいと思う高い精神性、ユニークな情報発信力などの素養を活かしきる実践型の学びこそが、強みではないかと考える。これに伝えていくには、自前での教育だけでは負担が重すぎる場合が多いのではないと思う。学生のために、有志の短期大学同士が共に手を携えてコンソーシアムを形成し、全国規模で教職員・学生が一体化した「短期大学力」を創発して、学生に最良の学びの場を提供できるようにするなどの工夫が喫緊の課題ではないかと感じた。

5. アンケート結果

【話題提供】

- ・ 短大の教育方針について、他大学の実施例や課題を具体的に示していただき、大変貴重な情報を得ることができました。特に、PBL では地域に受け入れられるために、教職員の皆様や学生の地道な努力の上に成り立つことを改めて振り返るきっかけとなりました。
- ・ 共愛学園前橋国際大学短期大学部の取組みは、同じ短期大学として非常に前向きな内容でためになりました。本学においても、選ばれる短期大学になるために、教育の目玉を作れるよう頑張りたいと思いました。

- ・ 学年暦の柔軟な編成と「Challenge Term」の設定などが参考になった。本学で同様スケジュールを組んだ場合、どのような変革が期待できるか考えてみたい。
- ・ 自ら学びをデザインし課題にチャレンジする機会を全学生に与えることはとても有意義であると思いました。

【私情協のコンソーシアム活動報告】

- ・ 他大学との連携事例について学ばせていただきました。地方大学でも ICT を駆使することによって、プロジェクトの連携した取り組みが可能であること、また、地域間がつながることで学生の学びを充実させることが分かりました。
- ・ 学生がプロンプトを何度も入力することが「議論」と言えるのかどうか、というご質問とご回答はとても興味深いものでした。プロンプターとしての熟達が、社会に求められているのかどうか、自分でも考えてみたいと思います。
- ・ 地元進学 of 学生が多い中、コンソーシアム活動により、離れた地域の短期大学からの意見も取り入れることができ、AL・PBL・SL のあり方について大変参考になりました。
- ・ 学内だけでなく地域の方々とつながりを深めながら実践的に学ぶ事例は大変参考になりました。

【全体討議】

① サービス・ラーニングの導入

- ・ ボランティア活動を通じて社会貢献と社会人力の学びを得ることは重要であることが分かりました。一方で、学生がスタッフとして利用されるだけにならないよう教員の教育姿勢が必要であると考えました。
- ・ 地元の課題を学生が認識し解決策考えることは、短期大学の人材育成の観点から重要であると感じました。
- ・ 地域の方々と継続的に話し合っ て学び場を創造する過程が非常に重要であると感じました。

② 短期大学連携による地域貢献支援活動

- ・ 他大学との連携事例について学ばせていただきました。ICT だけではなく、ヒト・モノ・空間を有することも必要であり、連携した成果をどのようにアウトプットするのがカギであると考えました。
- ・ 話題提供等をお伺いし、本学では、そもそもサービス・ラーニングや地域貢献ができていないことに気が付きました。都市部の小規模大学であることが、かえって活動しにくくしているようにも感じました。今回教えていただいた事例を参考に取組みを進めていきたいと思ひます。
- ・ 離れた地域の短大が連携することで、新たなアイデアを発見でき、お互いの学びを刺激し活性化できる可能性を感じました。
- ・ 他大学との連携や地域と連携することは、学生のコミュニケーション能力等の向上につながると思ひました。

③ 生成系 AI を導入する本協会のコンソーシアム活動

- ・ 生成系 AI を利用することでプレゼンテーションや資料を作成する時間や労力を短縮できることが実践例から具体的に示されており、ぜひ取り入れたいと思ひました。
- ・ 大変興味深く拝聴しました。短大生は時間がないという弱みをうまく克服されていると感じました。一方で AI にプロンプトを入れることで、どのような能力が育成されているのか、という点はまだ議論が必要であり、授業展開としても様々改善ができるようにも感じました。
- ・ ChatGPT は入力するプロンプトのノウハウを短大在学中に身につけることは、時代の変化に対応した人材育成の観点からも重要だと感じます。

④ 上記以外

- ・ 各短期大学でなされている教育への工夫や苦勞の先にある成果を拝聴することができ、大変貴重な資料を頂戴しました。感謝申し上げます。2 年間の限られた中で、コンソーシアムとして互いに補い助け合うことで可能性が広がることが分かりました。

なお、開催結果の詳細は、巻末の 2023 年度事業報告の附属明細書【2-10】を参照されたい。